

# 古代における鷺羽の利用

## 1 出土状況

2011年度に実施した藤原宮朝堂院朝庭の発掘調査（飛鳥藤原第169次）において、運河SD1901Aの底部にある青灰色砂礫からタカ科の手根中手骨が出土した（『紀要2012』）。SD1901Aは宮造営時の資材運搬に用いた運河と考えられており、これまでの調査で総長は570mに達する。運河底部には拳大の礫を含む青灰色砂礫が堆積し、土器や木器とともに、多量の動物遺存体が投棄された状態で出土した。タカ科の骨は、全身の骨格ではなく、手根中手骨のみが単独で出土していた。帰属時期は、藤原宮造営期である。

## 2 計測値の検討

手根中手骨の形態的特徴からは、タカ科以下の分類群に同定することは困難であった。そこで、現生タカ科鳥類の手根中手骨を計測して、より低次分類群への同定の可能性を検討する。

現生タカ科鳥類の標本は、奈良文化財研究所、国立科

学博物館、山階鳥類研究所、森林総合研究所の各機関所蔵標本と、江田真毅氏（北海道大学総合博物館）、松岡廣繁氏（京都大学大学院理学研究科）の所有標本、計8属12種132個体の手根中手骨を利用した。計測部位はDriech（1976）<sup>1)</sup>に従い、出土資料で計測可能であった手根中手骨の最大長（GL）と近位端最大幅（Bp）について、デジタルノギスを用いて0.01mmの単位まで計測をおこなった。原則的に左側の部位を計測し、不可能な場合のみ右側の部位を計測した。

現生タカ科鳥類の計測値を比較すると、オオワシ、オジロワシ、イヌワシの3種が、その他の種と重複せずに大きく離れて分布した。遺跡出土資料の計測値はその3種の範囲内に位置したことから、体サイズやプロポーションに時代差がなければ、オオワシ、オジロワシ、イヌワシの3種の可能性が高いと考えられる（図95）。日本鳥類目録<sup>2)</sup>に記載されたタカ科のうち、稀に渡来する9種を除くと、比較に用いた現生標本にはカムリワシ、チュウビ、ハイイロチュウビ、アカハラダイの4種が含まれていない。しかし、手根中手骨のサイズは翼開張とほぼ相関していることから、遺跡出土資料に計測していない4種が含まれた可能性は低い。

計測値の検討から出土資料はオオワシ、オジロワシ、イヌワシの可能性が高いと考えられた。これらの種は比

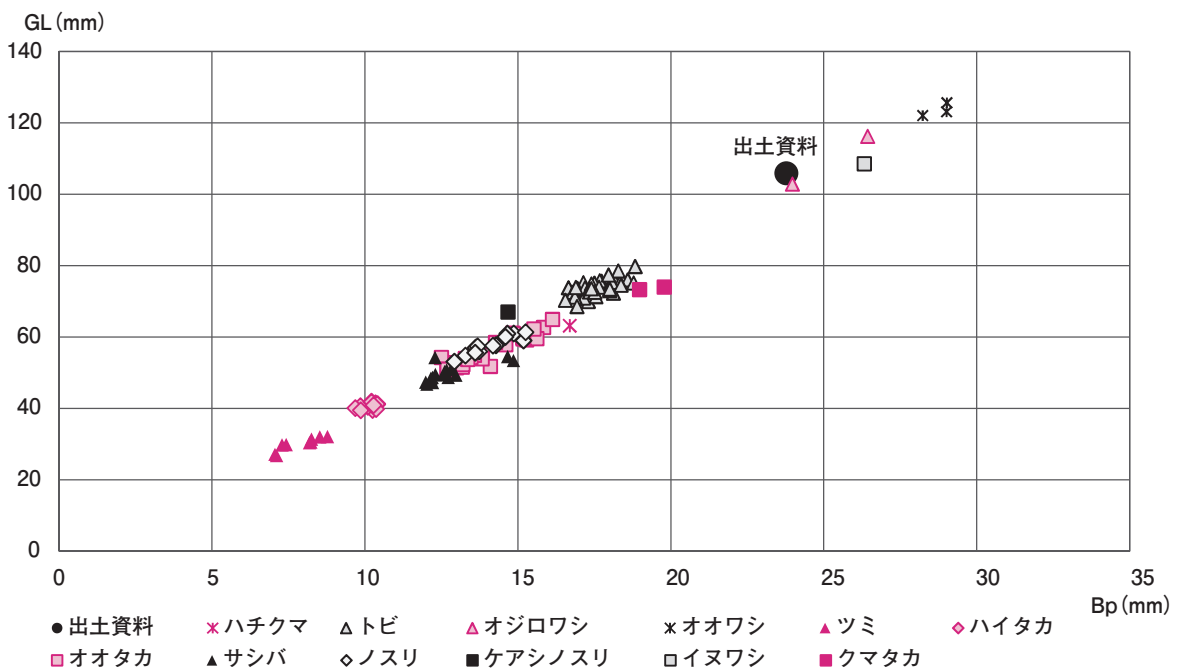


図95 出土資料と現生タカ科標本の比較

較的大型のタカ科鳥類で、いわゆるワシ類である。現在の分布をみると、近畿周辺にはイヌワシが周年生息しており、オジロワシは冬季に、オオワシも不定期に飛来している<sup>3)</sup>。

### 3 骨に残る痕跡

出土資料には解体痕跡が認められた。手根中手骨は、第三中手骨と第四中手骨が半弓状に癒合したもので、翼を構成する骨格部位の1つである。解体痕跡は、第三中手骨遠位部（遠位端から約14.5mm）の背側に位置し、線状の傷痕として認められた。傷痕は長さ3.5mm、幅1.0mm、断面はV字状を呈している（図96）。

解体痕跡は関節部に見られないため、関節を外した際に残された痕跡とは考えにくい。また、手根中手骨は翼の先に位置する骨格部位であり、筋肉はほとんど付着しておらず、羽根（初列風切）が付着している。つまり、出土した手根中手骨に残る解体痕跡は、羽根を切り離した際に残された痕跡と考えられる。

### 4 古代における鷲羽の利用

現生標本の計測値との比較から、出土した手根中手骨はオオワシ、オジロワシ、イヌワシというワシ類の骨の可能性が高いことを指摘した。そして、全身の骨格ではなく、手根中手骨が単独で出土し、骨には羽根を切り離した痕跡が認められた。以上の点から、出土資料は、鷲羽を得た後の残滓と考えられる。

鷲や鷹の羽は、矢羽として利用されていた。東大寺への献納品目録である『国家珍宝帳』には、鷹の羽根を素材とした矢羽が記載されている<sup>4)</sup>。10～11世紀以降になると、北方交易品として鷲羽の記録が増大し、珍重されたことが知られている<sup>5)</sup>。他にも、古代ではタカやワシを捕獲して飼養する鷹狩がおこなわれており、鷹狩に用いた死亡個体から羽根を採取することもあったかもしれない。

動物遺体は、骨などの硬組織しか残らないため、鳥類の羽根が遺跡から出土することがほとんどない。出土したタカ科の手根中手骨は、古代における鷲羽利用の実態をうかがえる資料といえよう。（山崎 健）



図96 出土資料に認められた解体痕跡

#### 謝辞

現生タカ科鳥類の標本調査にあたって、下記の皆様からご配慮をいただいた。記して感謝の意を表します（50音順）。

江田真毅氏（北海道大学総合博物館）、川上和人（森林総合研究所）、松岡廣繁氏（京都大学大学院理学研究科）、真鍋真氏（国立科学博物館）、山崎剛史氏（山階鳥類研究所）

#### 註

- 1) Driesch, A. (1976) *A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites*. Peabody Museum Bulletin 1.
- 2) 日本鳥類目録編集委員会『日本鳥類目録改訂第7版』日本鳥学会、2012。
- 3) 森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男『図鑑日本のワシタカ類』文一総合出版、1995、日本鳥類目録編集委員会前掲註2。
- 4) 会田容弘「『東大寺献物帳（国家珍宝帳）』の初歩的考察—国家珍宝帳の大刀・弓・箭具・甲について—」『山形大学史学論集』14、1994、近藤好和『日本古代の武具—『国家珍宝帳』と正倉院の器仗—』思文閣出版、2014。
- 5) 瀬川拓郎『アイヌの歴史—海と宝のノマド—』講談社選書メチエ、2007、澤井玄「11～12世紀の擦文人は何をめざしたか—擦文文化の分布域拡大の要因について—」『エミシ・エゾ・アイヌ』アイヌ文化の成立と変容—交易と交流と中心として【上】、岩田書院、2008、箕島栄紀「北海道太平洋側内陸部におけるシカ皮・ワシ羽の生産・流通と生態系」『アイヌ史を問いなおす—生態・交流・文化継承』アジア遊学139、勉誠出版、2011、箕島栄紀「『肅慎羽』再考—平安期における「北の財」とエゾ認識」『環太平洋・アイヌ文化研究』9、2011。